

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26861917

研究課題名(和文) 不育症治療を受ける妊婦の母親役割獲得を促す看護介入プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the nursing intervention program which promotes achieve maternal role of pregnant women that have recurrent pregnancy loss

研究代表者

二川 香里 (Futakawa, Kaori)

富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・助教

研究者番号：70377258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：「母親役割」の概念分析および不育症治療を受ける妊婦の母親役割獲得過程を明らかにし、不育症治療を受ける妊婦の母親役割獲得を促進する看護介入プログラムの開発を目的とした。概念分析の結果、母親役割とは、「子どもとの相互作用を通して、自身の成長のために葛藤し、母親としてのアイデンティティを積み上げる」とことと定義づけられた。不育症妊婦の面接調査から、妊娠初期における経験の本質を明らかにした。不育症妊婦は児への愛着を持ちながらも、妊娠の喜びは抑制していた。流産経験が女性にとって抑圧されたものにならないような支援の重要性が示唆された。また次の妊娠に向けては、不育症女性の経験を踏まえた継続支援が必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to analyze the concept of maternal role in Japan and develop nursing program which promotes achieve maternal role of pregnant women that have recurrent pregnancy loss (RPL). As a result of concept analysis, the definition of maternal role was as follows: in interaction with baby, mother has conflict for own growth and builds up her identity as mother. By the research of interviews, the first trimester experiences of pregnant women that have RPL was cleared. It is presumed that in pregnant women that have suffered RPL, there is a large gap between their perceptions about what is happening to their bodies and the physical phenomena that are actually occurring. Such women also suppress the anxiety caused by their experience of past miscarriages. It is important to support women after miscarriages, regardless of whether they have suffered RPL, so that the experience will not severely affect them.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：不育症 母親役割 看護介入

1. 研究開始当初の背景

不育症は、「妊娠はするが流・死産をくり返し、生児が得られない状態」と定義されている。平成20～22年に厚生労働科学研究「不育症治療に関する再評価と新たな開発に関する研究」(代表者：齊藤滋富山大学医学部産婦人科教授)が立ち上がり、不育症のスクリーニング法やその管理について提言がなされた。そのことがマスメディアでも取り上げられ、くり返す流産に苦しんできたカップルも適切な治療や支援を受けることで子どもを持つことが一般に広く知られるようになった。不育症治療では、検査で見つかったリスク因子について治療を行う。具体的には、内科疾患やホルモン分泌異常が見つかった場合にはその治療を行い、凝固因子異常や抗リン脂質抗体症候群では、抗血栓療法(アスピリン内服やヘパリン注射)を行う場合がある。リスク因子不明不育症に対しては、積極的な治療をしない経過観察で比較的良好な結果が得られている。先述の厚生労働科学研究の報告書では、くり返し流産・死産をしてしまった患者に対して、適切に相談対応をすることで、次の妊娠が継続して子供が生まれる率(生児獲得率)が高くなることが報告されている。しかし、不育症であることを誰にも相談できずに1人で悩んでいる患者が多いという問題点も指摘されている。

これまでの不育症患者のメンタルヘルスに関する研究は、治療中の心理に着目した研究が多い。不育症患者を対象とした抑うつ調査(齊藤：2010)では、患者の15.4%に臨床的に問題となる抑うつや不安障害が存在することが明らかにされている。また、不育症患者は妊娠判明時から精神的ストレスが急上昇し、不育症妊婦は正常妊婦に比較して、妊娠初期から「妊娠への不安」が有意に高いという報告(齊藤：2010)もある。横田(2012)は不育症治療を受けて出産した褥婦に面接し、彼女らの心理・社会的状況について質的に分析した結果を報告している。この研究では面接結果を(1)不育症がわかる前、(2)不育症の検査・治療中、(3)妊娠・治療中に分類しており、彼女らの治療中の心理に視点をおいているため、不育症治療を受ける妊婦がどのように治療経験や妊娠経過を受け止め、母親役割を獲得しているのかという点は明らかにされていない。

母親役割獲得については、Rubin(1984)がそのプロセスを概念化したものが知られている。そのプロセスは、“模倣”、“ロールプレイ”、“空想”、“取り込み・投影・拒絶”、“悲嘆作業”の5つの操作を経て進行している。このRubinの概念モデルは、母親役割獲得をテーマにした研究の概念枠組みでも多く使用され、参考にされている。しかし、これは40年以上前のアメリカ人妊婦を対象とした研究で明らかにされたものであり、現代の本邦における社会的背景にそのまま合致するには難しいと考えられる。母親役

割は、社会的・文化的背景の影響を強く受けるものであることから、本研究では本邦における「母親役割」の概念分析を実施する計画である。概念分析は、概念の構造と機能を調べることを目的としており、その結果は、インタビューガイドを作成する際にも有用である。(中木2008)「母親役割」という用語は、母子の愛着形成や母子相互作用に関連して広く使用されているが、その定義を吟味し概念的に検討された文献は見当たらない。本研究で、母親役割の獲得過程を明らかにするためには、この概念分析が必須であり、不育症治療を受ける妊婦に限らず、広く、本邦における女性の母親役割過程の理解とその促進のための看護援助の基盤として、大いに有用であると考えられる。

Lederman(1979)は、女性の妊娠期を母親になるための移行期ととらえ、妊娠中に経験され、適応していかなければならないいくつかの心理・社会的側面を指摘している。その中の1つに、アンビバレントな感情に向き合い、妊娠による不快感に耐え、妊娠を楽しむ受容することを挙げている。しかし流産をくり返した経験があり、妊娠の継続に対して強い不安をもつ不育症治療中の妊婦は、このような適応は困難であると推測される。また、Mercer(1995)によると妊娠期は母親役割の獲得にむけた「予備的な段階」であり、母親役割を果たす自分を想像する段階として、不育症治療を受ける妊婦は妊娠継続に不安を抱えているので、予備的な段階である妊娠期において母親役割の獲得過程は、自然妊娠し正常な妊娠経過を辿る女性のそれとは大きく異なることが容易に推察される。

本邦における母親役割獲得過程を明らかにした研究は、対象が正常妊婦や褥婦が多い。ハイリスクを伴う対象では、10代で妊娠した女性や早産児を出産した母親、双胎児を出産した母親を対象としたものがある。妊娠期に医学的治療を受ける女性を対象とした研究では、森ら(2011)が不妊治療後の妊婦の母親役割獲得過程を明らかにしているが、不育症治療を受ける妊婦を対象とした研究はない。また、女性において不妊症と不育症では妊娠に至るまでの治療方法及び経過が全く異なる疾患であり、両者が同様の獲得過程を辿るとは言えない。

2. 研究の目的

(1)研究：本邦における「母親役割」の概念分析を行う。

(2)研究：不育症治療を受ける妊婦へのインタビューを縦断的に行うことにより、母親役割獲得過程を明らかにする。その結果から、不育症治療を受ける妊婦の母親役割の獲得を促進する看護介入プログラムを開発する。

3. 研究の方法

(1)研究

本邦における「母親役割」という概念を明

らかにするため、先行研究及び資料を収集し、概念分析を行う。その際には、Rodgers のアプローチ方法を用い、先行要件、概念の属性、帰結を明らかにする。文献検索には、母親役割の概念が看護学においてどのように用いられているのかを検討するため、医学中央雑誌 Ver.5 (1999~2013年)を用い、分析対象は本研究の目的に沿った39件とした。

(2)研究

不育症治療を受ける妊婦の母親役割獲得を促進する看護介入プログラム開発の基礎資料とするため、妊娠期における不育症妊婦の経験を明らかにするための面接調査を実施した。

研究デザイン

現象学的アプローチを用いた質的記述的研究。Merleau-Ponty 現象学を理論的パースペクティブとした。

研究協力者

リクルート要件は、1)A 病院不育症外来に通院している、2)生児を得ていない、3)日本人である、4)精神科既往歴がない、5)妊娠 16 週未満であり、胎児心拍が確認されている、6)出生前診断等で胎児異常がない、7)主治医により研究参加が可能であると判断された妊婦とした。

データ収集

期間は2015年4月から6月。要件に合致する受診者に対して主治医から研究の説明をし、同意を得てから半構成的面接を行った。現在の妊娠の受け止めや生活状況などについて問いかけ、自由に話してもらい、研究者はその傾聴に徹した。面接内容は研究協力者の同意のもと IC レコーダーに録音し、逐語録として記述したものをデータとした。面接場所は研究協力者の通院施設でリラックスして語れる個室とした。

分析方法

Giorgi .A の現象学的分析手順を参考に、以下の1)~5)を行った。1)逐語録全体の意味を解釈するために全体を読む。2)逐語録の文脈に含まれている意味単位を確立する。3)個々の意味単位を、看護学の視座から現実であり得る表現へと変換する。4)変換された意味単位の全てを精査し、研究協力者個々の経験の構造を記述する。5)記述された経験構造から共通のものを導き出し、不育症妊婦の妊娠初期における経験の本質を抽出する。

倫理的配慮

本研究では、協力者に不安や不快が生じた場合は速やかに主治医に報告し、対応できる体制を整えた。また、研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。(臨認 26-121)

4. 研究成果

(1)研究

概念分析の結果、属性は、【母親としてのアイデンティティの積み上げ】【自身の成長

のための葛藤】【子どもとの相互作用】の3カテゴリーが抽出された。これらより母親役割とは、「子どもとの相互作用を通して、自身の成長のために葛藤し、母親としてのアイデンティティを積み上げる」ことと定義づけられた。先行要件としては、【妊娠するまでの自己形成】【妊娠中の母親観】【産後生活における適応】【ソーシャルサポート】の4カテゴリーが、帰結には、【母親としての自身の成長】【子どもとの絆形成】の2カテゴリーが抽出された。

今回の概念分析により、本邦における母親役割の概念には、日本人に特徴的な母性観が含まれており、現代の周産期医療技術の現状や家族のあり方に対する認識が影響することが示唆された。看護実践に向けての示唆として、このような母親の個人的背景やわが国の文化的社会的背景に沿って対象を把握し、母親役割獲得過程のアセスメントを行い、母親役割獲得を促進する看護介入につなげることが重要である。以上、母親役割の概念は、母親役割獲得を促進するための看護援助の方向性を示すことができることから、ケア実践および教育・研究活動に適用できる可能性は十分にあると考えられる。

(2)研究

研究協力者の妊婦は14名だった。年齢は25~43歳であり、既往の流産回数は2~6回だった。新たな妊娠が判明した時には、妊娠の喜びの一方、先の流産からの不安や恐怖を抱いていた。

不育症妊婦の妊娠初期における経験の本質として、《不安のループから抜け出せず、もがく》《常に流産を想定し、心の準備をする》《妊娠継続が難しく、心が弱くなることから自分を責める》《診察は審判が下る瞬間であり、極度に緊張する》《妊娠・切迫流産兆候に意識が集中し、身体の変化に敏感になる》《過去の流産週数を越えると安心できる》《夫と不安を共有する》《児への愛着が芽生え、生命に感動する》が抽出された。

先行研究では不育症女性の妊娠初期における不安の有無や程度は明らかにされていたが、本研究では、不育症女性の語りから経験を詳述し、不安の様相を明らかにすることができた。

Merleau-Ponty の概念における「習慣的身体」とは、私たちが日常的に慣れている、自分で認識している身体であり、「現勢的身体」とは客観的な実際の身体である。不育症妊婦における「習慣的身体」とは、流産をくり返し、妊娠を継続できないと認識している身体であり、「現勢的身体」とは今現在の妊娠を継続することができている身体であると考えられる。不育症妊婦は流産経験をくり返すことによって、徐々に自分は妊娠を継続できない身体であると身体心像を変化させ、現実には妊娠を継続していても、それを更新できずに自身の身体心像と実際の身体との隔たりが生じている。この隔たりが大きくなるにつれて

不安が生じ、その不安が持続することで、結果で得られたような経験の本質があると考ええる。また Merleau-Ponty は、「抑圧された経験が作り出す場、そこで喚起される不安が、幻影肢の発生と密接にかかわっている」と述べている。このことから、過去の流産が抑圧された経験であり、その経験からの不安が、不育症妊婦の身体心像に影響し、自身は妊娠の継続が困難であるという認識を強くしていると考ええる。

本研究では、流産経験が女性にとって抑圧されたものにならないような支援の重要性が示唆された。また次の妊娠に向けては、不育症女性の経験を踏まえた継続支援が必要である。

今後、不育症治療を受ける妊婦の母親役割獲得を促進する看護介入プログラムを開発するために、産褥期を含めた不育症妊婦の経験を明らかにし、正常妊婦との比較をすることが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- (1)K.Futakawa、First trimester experiences of pregnant women that have suffered recurrent pregnancy loss: a qualitative study、Journal of the Tsuruma Health Science Society, Kanazawa University、査読有、40 巻 2 号、2017、1-9
- (2)二川香里、長谷川ともみ、母親役割の概念分析、富山大学看護学会誌、査読有、14 巻 1 号、2014、1-11

〔学会発表〕(計 2 件)

- (1)二川香里、長谷川ともみ、島田啓子、不育症妊婦の妊娠初期における経験、第 30 回日本助産学会学術集会、2016 年 3 月 19 日、京都大学百周年時計台記念館(京都府・京都市)
- (2)二川香里、長谷川ともみ、母親役割の概念分析、日本看護研究学会第 40 回学術集会、2014 年 8 月 23 日、奈良県文化会館(奈良県・奈良市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕(計 0 件)

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

6. 研究組織

(1) 研究代表者

二川 香里 (Futakawa, Kaori)
富山大学・大学院医学薬学研究部(医学)・
助教
研究者番号：70377258

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし